

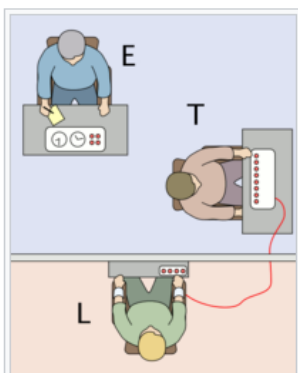
「イエスはこれを聞いて、彼らにこう言われた。『医者が必要とするのは丈夫な者ではなく病人です。わたしは正しい人を招くためではなく罪人を招くために来たのです。』」
(マルコの福音書2章17節)

アイヒマン実験の衝撃

今も読みつがれる『アンネの日記』の中で心を打つのは、ナチスによる迫害のもとにありながらも、人間性に対する希望を失わないユダヤ人少女、アンネ・フランクの楽観主義である。アンネは言う。「いまでも信じているからです。人間の本性はやっぱり善なのだということを」(1944年7月15日)。

しかし、第二次大戦後、そのような楽観主義を粉砕する実験がなされた。エール大学のスタンレー・ミルグラム教授による、いわゆる「アイヒマン実験」である。なぜ、どこにでもいる平凡な公務員であった彼が、ユダヤ人絶滅計画を発案し、冷酷にそれを実行に移すことができたのか、大戦後、多くの人にとって謎だったのである。

実験の結果わかったのは、まさに平凡なアメリカ市民が、「合法的な権威に基づく命令とあらば、その内容のいかんにかかわらず、良心の呵責もなく、言われた通りのことをする」という衝撃的な事実であった。実験では、答えを間違えた「生徒」に、罰としての「電流」を致死レベルまで流した「先生」が6割を超え、「生徒」が苦しむさまを見て喜んでた、というのである。(実際は電流を流しておらず、「先生」の反応を見るために演技をしたに過ぎなかったが。)



実験の略図。被験者である「教師」Tは、解答を間違える度に別室の「生徒」Lに与える電気ショックを次第に強くしていくよう、実験者Eから指示される。だが「生徒」Lは実験者Eと結託しており、電気ショックで苦しむさまを演じているにすぎない。 ウィキペディアより

エルサレムにおけるアイヒマン裁判の傍聴にニュー Yorker 誌から派遣された、ユダヤ人思想家ハンナ・アーレントのレポート、「悪の陳腐さについて」もそれに劣らない衝撃を世界に与えた。綿密な取材に基づき、彼女はアイヒマンが「モンスターではなく、《思考の欠如した凡庸な官僚》に過ぎないことを明らかにし、自分を守るためにナチスの同胞のユダヤ人弾圧に協力した指導者の存在までも明らかにしてしまったのである。

アイヒマンが特別な悪人であり、悪魔的人物であるなら話は簡単に済んだはずだが、実は誰の心の中にも、悪を平然と行う可能性がある、という受け入れがたい現実がそこにあった。

アーレントは言う。「悲しい真実とは、善の側にも悪の側にもはっきり立たなかった人のした悪が悪の大半を占めている、ということである。」

昨今、日本においても、耳を疑うような凶悪事件が頻発するようになった。また、発信元が特定されにくいことを悪用した SNS の情報拡散によって、今までになかったいじめや凶悪犯罪はとどまることを知らない。また、権力者におもねり、不都合な真実を隠蔽するメディア、官僚は後を絶たない。静かに進行する悪に対する答えはどこにあるのか。

聖書は、本当の権威者である神に立ち返る以外に道はない、と明言する。イエス・キリストは、罪という、そのままでは永遠の死に至る病から私たちのもとに来てくださった名医である。この方により頼んで罪赦されない人は一人もいない。自分が罪人であるという自覚は、実は神による解放へと続く扉なのである。

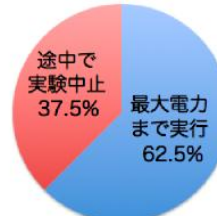


K・A・アイヒマン(1906-1962)

<実験の予想>



<実験結果>



ハンナ・アーレント